河海抄

朝顔 乙女

九

へ利1/2
1272
9

河海抄巻第九

正六位上物語博士源惟良撰

第十五　樵

おなしのゝ露にやつるゝ紅の文樵たえぬのはかなきさまの

巻ノ名は此贈答の詞也

斎院の御服して

父桃園式部卿宮の御服也

にくせみて　薙

うすのあらたなるおりてうちやつれゐるの喪のなとも

大和物語云かしこにて喪につゝせ給ひて九月は

さるとしの八月よりこもりかの喪にてまたそれさへの萬

なほしに秋なれはきこえにくしといへはこれをなむ御返

御記云延喜廿年六月八日斎院宣子内親王自去中不

字和田文庫図書
古梓堂
へ12 1272 9

病困萬夜暁出院之大守帥親卿桃園家
拾遺集にうめの花すゝ似る白本秋院屏風に　貫之
あらくのはな夜に梅の花をえもともわきそうつ
今案敏困親王事　延喜帝の皇子承平九月薨
猶遊事不相似り
桃園在一条ノ大宮西一条面中許世尊寺南（尊寺号桃花町也）
師氏大納言宅也保光中納言伝代々親王師氏桃園中納言
おもひきやちのかしのへしそとみれるけ
西ハ舞院　東ハ女又官
九條右大臣相記天慶三年二月十二日桃園家之寝殿（立坊儀）
此家本寝殿云々立小對本之小對早随之甚仍
不改作之
四条らひ

字　早乳　形掛　新猿楽記
このむつまじうらうし　太（フツカ）こちらしくは心をくしき
ちと五音通ずる也骨心也
いのちなきさへうち残りきこえおほしめれと
老子曰　壽多辱
おりくと来ぬるほへハ
長く
こそこうや内しく
擁護の方　葵上母
ハの世語のうたをほやまとそくひの方にかくおほしうと
桃園式部ノ宮事也　舞院事と思ひて語れ
にひ宮のうちとふもうきみきらめ
御叢の縁純色墨染服志定事也

村上御記云天暦八年正月四日母后崩同廿四日今朝撤御
喪之御屋後服黄屋於純衣細布小袖冠額
せうしたいめしして
秋浪道易也
神まひはけふ月のらし 芳
神閑 又神嘗 閑雅 再紀
ことさかえり家のむかしのことゝかさねひまもなく松等指り 拾遺 続拾
しく栄神さひゆく閑字おけれたるへけくなりける
うつりゆかしきのゝ嘗字をおもかもしかんはけつき
れ後成つく百番歌合判詞よさひてもとの雲の舞
の気と又同人あかこ作者歌合の判詞をもたそのとは
とやひありてゆひてしそ人てゆかとあり神祇たるぬ
事なく以つへきれ定家つゝ鈎力とらゆひるあれた

以下又つゝ範をかく
家 鉄のさひく 武善 曰
いまはすかのうさのふらかこそせはらんとすらん
神のいさあれ事也
ゆかはてゆふをくて涌てゆくてぬのかをよはゆつき先の
神ひとをくて小きるし
うれなのつきはいれあすてのせてきへてとの酒あいきやうもこよ 安形
あのうきれと神にはいて待る歌と
先代旧事本記云伊奘諾尊曰我所生之国唯有朝霧
而薫満之哉乃吹撥之氣化為神是謂風神也風神名
級長津彦命次級長戸辺神
伊勢人中戸檢云科戸風 吹風 天乃八重雲吹掃
事如く

樹下集云
行とらハ志事の世をきり世をかさね住かの人にはなしのいて
よりひのはしりの小枝もねてしもなからわさすへきされ

空画

世をしらぬやつ迄といゝまてこゝにきこてすくるとへてや
たゝかといゝしそるゆくいてうよ悲しき人の身をわさるまうすと　信吉　如泉
けふやるものしゆきてねしよ

あさやか国のえ　揚写なりん之
みかなりの露のそら待ぬあさかの
我もつまのいぬまよあさほしてまうりしとあやしまゝ
あとゆいれつとのなりひろう

青純　靏
はゆるひしとも

方由

何かしく地はしかわりへそ代

畑としくこ
やくといゝ行つきとかき渡へは
従三林をの命をまてぬまる地に秋の子枝とやくとやく　信捨遺　和泉部
中よりしさかへまされしも

祥　七ノ月　星花
さぬ渡りのまゝのかりしさ木こて行

梓見　星花　いしゝ何とし
あけやきこうてのあまりのいかわく
次しぬあきのいかやき夜のまたけいゝしとぬとこしそすら何を純
なつ待中くこそうらまう木しもはつうれとうらハて
かしなくいゝき世なりへやすま寄何の志やかやき夜すも代　あうへ
みとをりのまし守かうしるへて渡代いてさく

閽人 論語文和名 文字集略云 音昏 閽人和名并加度毛利 守門者也

うとくきこえしかなれ 薄暁

上のいとやくさひよりいふととうなつと

打ち馬歸 生易蹶 開稀帀 鐘漏鄰開 白氏文集

粉になすてたけを極ふみもせのあさふなるよゐ世に

毛詩曰三月不見況於三年

或曰自須磨海に四年之

よもきうかど

蓬門 蓬衛 文選 衛門 達戸 柴門皆隠者之

茅蓬為我廬 編蓬為我門 白氏文集

またあくひもちゐ猶く

欠伸(アクヒ) 曲礼 新猿楽記

ほとたくいひ出とうきてよあねとすれば

呪鼻(ヒキ) 河文

たえおとく

祖母なれとも老人とうとうにたはうるとせ俗りしかや

たよる覡をかたき

かやかしは海きうかにとひ人といふことを猶くなりしん

曲礼 魯記

あまてるやうきおかふはいひふうへてかせむたいあゐれしおほけ

いふし限るたた

乗とうしといひて往よいふ文人のうへてもたけく色きよし

この句のかみ猶

桃(イトミ) 桃戦 同

ひさすら

太史 白氏文集 史如 永 史記

任捺 いさすゝきも思ひなくみなおのまへにいりてもおきわかれたる
もの又ともこの契りなきわかれのやうにや思はしたしと
たゝやのおやと思ひましいひて御ゆるされてはにけぬるなりへし
ありつるおほくのけさしもかゝりぬるもあはれなりしひとつきて
清少納言の枕草子すき御まへにの先姪おもかけのなさけ
志ゆとの月かしこく
又ありひとしふかくなりたる人とも人にゆくかけて
任捺遠 いまいさい思ひさむしこゝろとへつてすくなかりける
ゆるされ
中夫 白氏文集ゆるしときゝたるは中々のみちなる
コヽロツカラ たのもとの流すきなると
中勢心 見花 折日 身日
逝てきものつゝのわきまへしとき示たくもすてらうつる

春風に花のありとなきを見けんはやうつゝ迷ふとも
かゝてはいへいかなるの深き花の芸たえやそうつゝやみなかに迷ひぬ
とし侍るをよみわかしいきなはたましも
琴 いぬとのこゝの山姫いゆふゆきとへてわかなりしする
あさゆふ中きあかつきのいきにしいさとこゝへてさなかなり
あはれなはしこゆ
ことのかゝりけらなは御ゆるしのはあなけれと
楊日 孤イチルヒ
春ゆくふくかなとなけすと
たゝ あかねやとむとそれひとひ又はそ筆にくさまそ逝すみ
なほさ御すくよめし流るそ
入大臣
つ結なれ世なり

河とふつけても人のみのよるへと
春秋に思ふわくわきゝ物河につまつらはれそ之
乾きものゝ物のしるしのとめぬ河の雪のひかれ
おひやあるうし。也
ゆきくてなりありしを冬の月の雪もたしてのゝわか
すゝましきにあしるゝひとれ多く
十列　冷物　清少納言枕草子也　我先ノ
十二月二秋　十二月扇　十二月葵水　老女假粧
女醉　胡瓜花　・清錦醉舞　沾酒神不
勅使被打因競馬　罷論八仙畫舞
みと海とあけさせ給ふ
遺愛寺鐘欹枕睡　香炉峯雪撥簾看

一條院雪の朝に香炉峯の雪いかならんと仰ありし
清少納言御すゝにぞ事をはしまて御簾をまき
あけられけるとや河のきたりし河の人ゆ宮わ
ゆきさまるつしせさを給ふ
雪團
應和三年閏十二月廿日令右衛門志充為ア常則推雪
作蓬莱山於女房小庭しる幼ツ偈常則　及畫不雅
之役ち三人禄有差
枕ひしとけかきことの井とさき
常　蒙袴のこしの事也
ちいさ井ことをいわるけて
師説ニかゝるけはらんし次の詞よかくへいひつらしの
さるをにいて井てつときなけよわるぬとけり

一休童氣あり
いとけなきころよりしも殊にほうけなまと
にやありけん母へは珍らしきおほせ給はんとて
むまれ給ふ中宮の御前なり宮の御かたへ召し出され給ひ
給ひしなれと
枕草子にも中宮の御かたの御つかひ
はいと幼き内侍たちはかれは
宮の御かたにて世にも珍しきさまを御つかひ
行かれ中宮の御かたに参りかはしつかはる東福殿
にをはしまして世に聞え侍るといへは
ふかみどりなるつみのこゝろもなくふかきにけるに
此宮の長徳二年より長保二年の前の事也此物語寛弘
の末なれは一条院の御時なれは又宮のよは藤原氏の皆といふ

て此はくさ不審とおほしけるにや
やうやう思ひ合せしかりつきなるにや
なかれいたりてはかりはかり同也
かくしさの
之紀 文学 文庫々
あつけさと思し給に
閑
みとどけさせ給ひし風流の
延徳元年十二月季勅太上天皇周忌御悉今月廿三日
宣令天下諸国二寺見僧尼奉為補經寫
五濁悪世
あらんかきりせられたりけんと

おもかけと心にかけて称へしまくらつりかは逢
くら次よここそは
一池中華盡海　乾々無芭滋生人若歯本庄宗
乾紫絡絨倘浮月行人　五今讃
なれし人のかさしに海のせくもかけぬるのせしやまと人
みつせ川とのようへきなり　三途川事也
秋行かはよいかけぬる水のせきやまと川　不審

第十六　心通女
巻名
おもひても神さひぬる人あまつ袖つまきのかくらへのわは
前此為以文苔耕婿事為宗
ちらりて実のゆくそもとさきのあまは
落雲女院一周忌也
いろあへ無事の給ひとくへの程
綵服之
ゆうき九日　舞台の猿日之
から衣きつは此ことなよふきよはみえのせつ世と
おもとかはからもあるの絨帛とせぬかるの物そなる
かくさしくりて
ゆかりしらしにそちらくりてく

わか志のえらくの事

夕霧志ニ時十二歳元十二元服事　且相当奏注

やかて四位りなしてんりしとも侍

選叙令曰凡蔭皇親者親王子従四位下　備親王者

不限者品出品諸王凡一戸令内諸親王不注品諸

者皆依式例諸王出叙四位事上古定事也見續日

本紀亦不選異録

源興基　弾正尹人康親王男　貞観八年正月七日叙従四位下元老

源博雅　兵部卿克明親王男　延喜十九年正月七日叙従四位下元老

親王子従為傳例　一世源氏大臣息大略叙爵源兼信

太政因幹花大臣子仲傳子恵明親王忠冬明大臣子昭元叙従五位下之

因従四位よりハ人りと思給へとも猶所叙

あされて殿上りかへり給ハ

されハ六位録記ゆく童殿上より後還昇也

さいかかくあさらよ文おいつらすましく侍れと思ふあれて

加階とかくもかく人またいつと海け義ハ　秋行候

大学のみちにまつりてのほいいかふらいま二三

年とかうのかうならんいかにて

尚書大傳曰古帝王必立大学小学使公卿之太子大夫

元士之適子十有三年始入小学見小節焉践小義焉

年十五入大学見大節焉践大義焉入小学知父子之道

之序入大学知君臣之義上下之位

三代實録ニ西三条大臣在童稚為重聞明及於弱冠始学

大学雅有才弁　論語曰子曰三年学不至於穀不易得也

貞観格序大学者尚才之處養賢之地也天下之俊咸来

海内之英並萃游夏之徒元非公相之子楊馬之輩

故曰寒素之門高才未必貴種之未必高才足史
王者用人唯才是貴朝為廝養夕登公卿
いやしきもあやしきもことゝつかへまつりもあらむすとよねこ
ろなはらわさぶなんなり

う御のきぬくらゐよりのかみのちは何かしらわる人のさき
小いまうろきとすゝついうし
月よし御才のゝくすし勝。史記項羽本紀にはやましろく
やまと魂
和国魂 才力魂魄也
せちわたる大くのすて
息 本紀窮者曰

ろうの物語にてせちわたる大くのしうとはり
あされつくる事
礼記云已冠而字之成人之道也
と云ふに佐冠者其姓に字を異くして二橋宜源業などゝ
曹司とては爰也
水原抄云仮令菅原と書て大業の字をせうと文章院ゆかん
業然としての書をす事也これは当時も彼院の初
来の時吉書学生の入学の名簿と秀才清身してきりいふる
時業然のきゝくて次とさる浮家も仍ていかにお朝も
仮令甲忠清といふ字は違書也作にゆうと代て候
後ゆの冠者の時つけ候也
又さもとも嬉よくつの事なし
是はあらんは世てものゝくしく式はらぐとにあへとたゆとを行へ

以上はよりも毎月にすくこよめらわおそるべく
あらしさとてなきは
他本には求出せり紫末之かさへるしくとい古辞の註れ
肩の被列にしのへきと以てわれ
伊勢物語に志賀のつこもりうへのきぬとあるにてよつ
ゝるゝは尤にていてろゝれどきるいやしきわざなれ
らはりぬれいうへのきぬきとりやうてせんかたなとぞす
てそれなれなきゝら肩くるし其ほかの尤れ
色いしすてとらせ給ふ
雜子は
あき田くこるいてたると
この名とい黄紫の名付よ起るさせるとも也代さらしれ

たるとい盃とおもく千すなれ廻流し
そういとのあるしるけはさひさしまるゝて（誹諧）
此歌古人大皆以不合明水原抄には垣下を主とみるとも志
いずとおもしこと句と切て漢字を付られし是又不如なる
六條にい秘説あり
かくるわのるにりしとちてもそくたほやけよはくへぬそうぬ（行）
おりさたてなる（鳴弄）
儒者とい上ろの歌ほと早下去てすへし
まり物しならやすんみそくひさしかり
なるたりやまりたりしたはえやらくてわりそろし
おりう徒のなろそろし一派とをたそやとれせを二段
いかうしんとすやゝそられ三段風俗鳴高又其大家
西宮記云吉改日本弁説結改如常上下入外記人宿

韋偈鳴る
ゆとひきてちらたゝいふへ〳〵人ゆとゝしゆすて
実庭退さ偈すんとゝし　江礼　早紀
ケゐけすりこてもこし
うらえんなりけよゆうゝかゆしく
楊亭　大郎　猿丸
けゝましゝまゝいされなんとの御へ
雅懐
人世の人いひてゆんの詩無人くれたゝとゆゐ無て
まうりてせくつくり御へ
死木詩人知ゝるゐ韻　中書王　奥平新之
年齢捐邁減詩情　詩誘鄒牧一句成
庭嘆久拋風月賞　桃李ゝ外忌死右

江ゝ言
春天死木留芳葉　自詩人知得擅花
何処未兼霞奏色　誰家不寫窈峰林
句同唐帝専房女　嫉嘆秦醫一里光
菓根結林零落士　西園今日接輝芝
と代しゆ貴賓(一説)庭席若ゝ韻上ゝ絶句呈候へ
みけしあらたいの好(娘字)えりてりんさりつせよそまつゐ
うらきはの夜すれい　ゝ月の詩之上句まうりの詩とゆゑり
ゆゑのはうとむつひえゝさ書状すし行へさ兔御〳〵の
東瀬　字武子　蘭平人や好読書夜月江池行生绡盛粉牛
紫照書院司　司徒
孫康家貧江池常映雪読書淺川ゆ史大丈
えゝの雪といね〳〵燈之九枝さまいつり雪と燈り擬た

あるいハ
仁王経云佛告大王㢧作九色幡長九丈九色花高一
丈千枝燈高五丈
太平御覧第八百七十巻中記曰石虎正月會於
殿前設百廿枝燈以鐵為之
西京雜記曰高祖初入咸陽宮周行府庫金玉珍
寶不可稱言其尤異者有青玉五枝燈高七尺五
寸梁王筠燈詩曰百花耀九枝
傅玄朝會賦花燈燭百枝之煌々
是等皆燈を枝といへり
たとへハいへるなり
此語といふハつきと略したるなり
うちつきわたく（入学）といふ事せさせ給ふ

寛平八年十二月十三日齋世親王入学當日早朝召文章
博士紀長谷雄於自持名簿踊々長谷雄辞辞親王
奈堂
二世源氏歴儒業例
儒 源伸行 従四位上民部大輔 蕃別親王男 元弘侍侍読
儒 同俊資 正二位大納言民部卿太宰帥 男
俊資ハ尤叶今例也
執政氏歴儒官例
忠仁公 天長五年閏三月甲午任大学頭 時従五位下
やかてこの語のうちにいはしつくりて
文章院中有東西曹司 撰付也
院ところ丹て 集 日本紀
春の夕月のうちよまさといふよみくそ給へるハ海をそ

かくしけさせんとてまつりごとをへて世にも傳へ給ふ

史記 本紀十二巻 表十巻 世家三十巻 書八巻 列傳七十巻 都合百三十巻 授為八結 ツメテ百八十二巻

馬遷作　裴駰集解

索隠注

索頭以下各一負博士以下各一負参考試厳生貢

挙吏名未博士加署渡案以上見下文以下以算

選三合量試所座前又以讀書未並以博士

秀才謂之試〔侍士〕并試所未前以考古試所々拝巻進出

帰門下允作之級未試所情立後級允文作之数

居未試所情於髮居下脱皆某座並供垂以作

之算所唯之標算〔二定之 算之旨〕議問　勝行並試博士前試

博士對策以上史記乃本紀乃巻乃巻三乃巻世家乃

上供乃五乃巻下供乃一乃太傅乃中乃供乃七乃巻以

作之今讀試所各拝供拝巻引音讀之以作之古々来

天試博士對以之文作多り　以之書注せ案掌将以

筒備注由来試所退お堂監お帰門外作登科

酒希事

人々のくさへき

論語言下覆注曰覆備後

此書不可もと覆勤とてあるもの也

いまのでもなくかきくもりかなつくしてぬつけま

つまし御のかちす

かたきとは語ぶには合銃をせんとて先かくまる

しと付之く楽く索試と合銃に掛まて今の内也

試とかきしのかうさこれはつとて一説を爾業未知爾

筆とは催名を付するに従て既に明らかなる事をはなしける
母よみ給ふ事とも志るしのおやこすゝめとりまれ
ましらへんり　大学寮門に
うちそ由へは、おほやけ志る物をあつまく
大くれの中の六条なれはかきあつめ志るもの人
伊勢物語にその本にするにはなりそてかさしたるかく
みち志るを父母はしみえの
文人（モンジ）擬生（ギシヤウ）なといふなるを
金楼子曰正仲任言史説一経者為儒者也
伝古今者為通人之上書奏事者為文人之
能精思著文連篇章者為鴻儒之若劉子政揚子
雲之列是之蓋儒生博為通人通人博為文人之

能為鴻儒也
　文人は文章生擬生は擬文章生とて文章生に擬也
　或擬進止トモ
源氏のうちの后より始めて世の人ゆるしきこえ
後朱雀院の中宮陽明門院（三条院皇女）中宮嫄子（敦康親王女）
為后代假の源氏君日大臣左大臣よしなかの
後三条のみかとの寛弘の後冷泉一代のみかと
桓武より後天下国母のうちは大織冠の御末之惟仁より
来り皆外家とよそは執政とよし也
王女の后の行事（藤原）
朱雀院皇女昌子内親王（冷泉院）　世は禎子内親王女御とく
（文徳王女内親）東子女王（冷泉）孝子（同）媞子とて（同）寛子とて
（光孝）班子女内女（仲野親王）悦子（朱雀）とて（文彦太子女）（村上）嬉子とて（重明親王女）（同）彦子（仲野親王女）

凡王女のことかきり次姓をも書いはむつかし
書すまし記に依女の源女のまてあり
おしく大政大臣にあかり給て

皇子任太政大臣例

大友皇子 天智天皇一子 天智天皇七年始任太政大臣・

高市親王 天武天皇四子 持統天皇四年任太政大臣

これは内大臣よなから給て世の中の事をまつりこち給
へくゆつりきこえ給

内大臣執政例

堀河関白兼通 忠義公 天禄三年十月廿七日内覧同十一月廿七日関白 内大臣

中関白道隆 永祚元年二月廿三日内大臣二年五月

帥内大臣伊周 正暦五年八月廿八日内大臣長徳元年三月八日内覧

わつらひこもりけるて

宮腹之末橘花奏にわろしとなりの帯刀とけるも王孫之
こまかなる物語とも帯刀家のあるしとなりけむはかりうつほ落窪
物語なとにはさしたるあり
こころくのたいしきやうとにく

大政大臣内大臣　新任卿饗は来ぬ
たきのうしなさも知らすぬなかくらして
枕草子蓋これさとかつね萩のうへ風そよきけん下荻
ひさしう女の志ぶくきやうなれと
うつほの物語をはいかなりけるハ女の世にはやうそにしけなる
すこしも手向をもれなかり
とめて上手のゆゑよ侍れと
四条大納言延喜内府より三代にわたし事と
ちかひなとする

桂

ゆくへのゆかりハ

下場

とうまゆのてつき

箏の琴の事

かせのうらけさしよりしとうちすゝめて古人のしるす

称ふあやしきもあはれなるゆかし哉

落葉俟微風以隕風之力蓋寡孟嘗

遭雍門而泣琴之感已末何者欲隕之葉無所假烈風

將墜之泣不足繁哀響也

文選豪士賦序

しらぬらくかきあはせくしやうかし給（唱哥）

秋風楽　盤渉調

笛の称まく事のしはゆきいすわれり

向子期思舊賦序曰隣人有吹笛者發聲寥亮追

想曩昔遊讌之好 文選

ゆくへし　謡

笛柳子之

うれしきすゝやなくらん哉

文字　僧正遍昭

ことさらにいふうしとなかり

明君知臣明父知子 史記　擇子莫如父擇臣莫如君

知臣莫若君知子莫若父 史記

ゆあらけ

ありうこと　讒言（ざんげん）うん尚す

むかしくあさやいまり

雄抜 日本紀 石窺 鮭 アサヤリ

ゆあましいふも

みしぬいつりきじとあるとのつゝおやまつなりし

ゆかりにもあり

（ふるかと）姜桐欲贖子罪陽石（武帝女）汚公孫謀 漢書

康子内親王（延喜皇女） 弘徽殿ありしかりしゆうら母九条

右姜桐志ぬひてまいりせ給ふゆへのちにはあついわく

いそかり給ふ関白太政大臣（忠平）の母之世継

左京大夫道雅密通前斎宮当子（三条院皇女 母后娍子）

文をいひせひ志らす

是非不知

風のをとぬけよまらふてれて

風生竹夜窓間臥月照松台上行

くす舟のゆくをまうとや

露（たと）やすき雲井の雁もわたらやあまをかへるなり

ゆしも志をけ給ひれとなといつけく

吹あれいかしも志ともの秋風とえたれとみとえひとのれ

（こつ）松ゆきの秋の（さらとい）知すつ荻吹風そさつゐかうし

さしつ□なるをけれる人てらせ人（いうきりと指之）

鎌刀（かうとり） 礼記

或説人のなゆはしきとゆく志りさりとえすゆのとく

又ゆしらとえなれくとかてまとらとえ書通むり給也

十にあまりぬるおりし御かたかたのよみてまいらせしをめてたく
こゝろさへそこはかとなくおかしきにおほとのあき見ゆ若ハふかき
せりいさめ（制）（諫）しを
つましく小思ふらく（吉）
三條上乳母尋志君と不定の詞に
うらうれしかりきを　なまき睦まじく
かゝるかたに人やりならぬ次
人のうへのみならずゆくよなよなうきことゝおもひつゝ見ん
ときめかしゝ又若なきとゝまりけら
[illegible]女院崩依諒闇被停止
本朝月令曰五節舞者淨御原天皇之所制也相傳曰
天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下
雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應曲而舞獨入天
瞻他人不見擧袖五變故謂之五節其歌曰乎度綿
度毛乎度綿左備須毛可良多万乎多毛度尓麻
岐底乎度綿左備須毛善相公意見内
一請減五節妓員事
右臣伏見朝家五節舞妓大嘗會時五人皆叙
位其後年々新嘗會時四人亦叙位例也中古已下
大嘗會時以人家競進其女以充此妓是常
年人皆辞避可闕神事爰有新制令諸卿及女御
輪轉進之其費甚多不能任伏案所實江仁集和
二代此妓内寵所遍令諸家擇進此妓即以爲選納之
便之諸家僥倖天恩不顧糜費乃賊破産以貢進
方今聖朝既共推薄立其防閑此妓女舞ゝ海
家之所遊宴依此妓數人還有何用之

栄四祀当々神女来拝未露宣数々文人伏望
拝食家女子未嫁者二人並為五節女時服月料
禎令饒活節日衣裳亦活之如若有節不嫁経十ケ
年者節於女叙位令者嫁若於不嫁経之於後人へ
例節拝並共替人亦以前年

寛平遺誡云毎年五節舞人進出廻彼朔日經定
尤切令須云々、中人令貢二人、淫非其子而令永貢殿
上一人選入之、而代女御又貢一人云々、女御依次貢之
然而儀始以為常事、次入十月並召仰各々在前
令用之

わらはまつ

上童　下仕

うへの五節はかしきよりあつらへかたりて大中弁かうけたまはりて

たてまつり事

五節は恒の年は公卿二人、殿上受領二人、御代始には
公卿三人、殿上受領三人也、后これも受領か殿上人より
たてまつるを、それは人の五節とぞ云、五節姫は人事善相公
意見云、新嘗会時、公人にしく年依而新嘗会若
公人凡云、三人、志摂家中納言以下殿上受領志良
清涼殿之舞人也

大納言かはりてへしまゐらすとぞたてまつる
宇多院御時舞姫一人をこへ女を中姫仰られたよし　寛平遺誡
あめの海とよりひめきみ人てわかちよすか神
みてくらにはあまくたりしきしまのひめぎみのみてくら
とよのひめは五節舞姫事也
試神かえりはしまのさんすくられし神のかんみけるかし

注をふまへていふへし
うりつきのとの頭を
（標紙）とあるハ神らの御くの有名久しき世よりならひきたれ
ありけり
標（ウツ）　文選
なにしめしさ海つれなる文の中の結まとく
殿上六位雖立衣之　蔵様文雅記宣旨也
或説加織事也六位織事ハ是標にも色ふかし
西宮抄云揚黄衣王者以下雜人不用之右時省制（云）
下不用之代　五位以上用　殿六位皆用之
こしける
古これからかしき也之文ニ云ニ　廣韻云唐大之　たゆまやるうの也
じゅうしのめとまなしとあるのするさ

とあるハおさ也女と以て百葉に未通女なと名によかある
いまさらつきをあて女の事なりといふあまたあるハ天女の
事又只女乳母名也　又百葉よハ書女と以て以ってしといふ
筑紫文苔事也　又花鳥集
さりの日のくれて
十二月廿七より以下海の名とて二あれハ下ノ七之但上ノ七
とて例月日まうりの日と云辰日ハ文苔の紙の苔合見之
あなとりの海をさとりあて
畫摺紙とハ書き朧紙也右紙の文ハ下よあそて朧よ
てすりかれは文苔のなりかれハ是紙毎にあ
あつふしあて用之也
いけみて
以蘿蔦為手綫　古語拾遺

渋柿なとといひけ草を髪とすること　昔のならし
宜しうとてかせは
けふやなかれん文字摺
あふみのかゝみのけふ（此のことは）すゑまてに文節
前段の歌に皆稜とすること海をしく痕とある
中儀之幸浜難波七瀬の儀つゝのを河国摂津国司して
まつる辛崎は石狭むる使臣
辛崎は文屋なくて晩に退出の時祓とする之上古より
かり行き難波すてとも下向を代は内野にて渡湯察さし
て海にけて勤仕し

七瀬所々

難波　農大河僕　摂津　大嶋　橘小嶋　山城　佐久那谷
辛崎　近江　又浜中七瀬　川合　一条　土御門　大炊御門　二条末　中御門

寛和三年七月廿一日清紀日祈人式部丞藤原雅材供
清祓物以明日令天文博士保憲赴難波湖及七瀬之
河臨禊

拾遺十
みそきするからさきにおろすあみはかみのうけひくしるしなりけり　千秋本

同集
すふいより人の行末まてからの晦を森の神のもるらふ　いせ
かたのなきなかるゝと申して

まつり
古人大九のかわとく
今案ずるに紀にしの字をいまりと読せけ此まと略
してまりとこれ或いはまたしとも書し

ちかし
主之世継にたふしれのにの務人といふますらゐし

いさゝかしつくへし

きんち

汝之世継に毎此詞あり（さけらの物語をきんらホとはけり　らけの物語しきんらいまんをのへとはり）

くゐ中より仰らるゝそ

みくゐの御内のくゐ中すくへすらこ給はむとたまあひて

大臣のめまうちきみたちにたいしまゐせと

こまりのおとゝは公家の御くさまりたまひて

かくらさきみかけをやさひゝらとらいよにそてなる

此らの御はかりなへし

よしあきのたとすまことかの御のくたなくて

あをむまのせち

光仁天皇宝亀八年正月七日天皇御楊梅院安殿

設宴於五位以上賜禄内厩寮進御馬並郡有進

五位以上装馬　乞白馬節

忠仁公覧白馬事豊記不見未詳之但官治開白

以被例覧之御本勿論此白馬右司読流文於之

忠仁公依叙准三后宜旨被覧之此官治開白同之

仍源氏太政大臣同依准三后読之者也

執政准三宮例

忠仁公　貞観十三年四月十日為准三宮

照宣公　元慶六年二月一日准三宮一如忠仁公故事

仁和四年二月十九日更賜之依前固辞不受也

貞信公　天慶二年二月廿八日准三宮如貞観故事

同九年五月廿日詔賜之

忠義公　貞元二年三月廿日准三宮

東三條関白兼家 寛和二年六月廿二日為摂政蒙准三
宮宣旨
きはしめのいつのあまりのほしまて朱雀院より行幸ありけり
内記云延喜十八年二月廿六日己巳之日東六条院より六月
依例元服比天暦二年三月九日康保二年十月廿三日
安度拝礼似元
ゑあとのわかのさらぬかねともおほつかなくやの御つとそ
しそさはりたりたることをもしてまいりあはしけるは比いつきはなへ廿六
潰代暦曰大唐景雲三年壬子正月五日内外文武官
各加階及天下老人与板授官年九十已上老与鄉
祀身分
西宮云内宴白河下皆麹塵主上服御赤色白橡一
上御服同色袍花文例之舊例之中相具信之兼

小野宮云大臣着赤色但延喜之間國經大納言時着
赤色ノ時儀ニ諸臣着麹塵袍暢一日之高名之時
主上令着赤色御袍給又大臣一同着之保元内宴日入道
法性寺関白殿着赤色袍之由見相府日記
桜下襲事
西宮記曰裏桜之八幡行幸時御日主上着桜下襲同
年諸行或又晴の行幸なとには春は三つて着桜桜或桜萌
木下襲深紫着束之
あさふのつきのこころにはふりまさるへてゆふふかえすまふ
延喜廿年七月九日内記曰十月廿三日或少者善着試
判文章判及才志三人
登省記曰康保二年十月廿三日行幸朱雀院試詩
於院人不復もりし

竜葉共舟輕 勒浮凌氷興離
及第一人橘倚平 七言 字ノ宣哉ノ逸 竜漂ち 毛補子
藤原雅材獻策 年歳未材上湧同毛木之例し
わくらはの
水源拘ミわくさ秀拙といふまにし学問のすめのりくさえ
もいとふかくふかえ奥ふかえ
式ミ奥義ときいふさらなる人の勅文
とく栄曜榮花ある増なとりてたふりてき称るを
けふへさ大夫ともみせともわくてものへしとわり奥ありあるそ
はするふ舟りぬりく
うかりの物語にすゝみあさんえとのさいたまりてありう舟は
のせらまていくらとすゝらたもし流さゝ又つくり進士
りすされせ方略たん宣旨くをりぬ

放島試ホ朱雀院の試にハ学生皆舟ありて中嶋ホ
ゆきて詩作レ文章生試ハ式ホ省ふくりし首試也
せしを朱雀院にてたふりけること
蛍のさらつふかいすりしみくもしつ出て秋の誰そわれる
蛍火乱ゆく才ふかい昔よてかうかりのおるとも見ゆれ
ちらうきしつひし
ようのみことをよしいまは無事にて
六條院の中才ふ花宴ふ秋風ホ舞ししえ
かくあらをもてたはつらかれハはとをめして無事に実ハ
いらのたらわんきしの時とめ人の中ホ宰ありせんりく
きんれいの中ふきおもしせあ事にて侍ん
去年多紀ミ天慶二年三月九日朱雀院行幸海渡シ問
求文勝章ミ緑高不可的証左大臣ミ操縦志逝性宜见

太上天皇上召書寮内琴或中卿和琴宗
琴太常帯箏 蔵人 又召唱歌数人作曲
桐
さくらの上人あまくさつひあをさくとあをひくはさ
りゆく人
唱歌事 左近
あなる 催馬楽 桜人 日
あなさしとをふのたしとさやゆめてかくやありなん
やをふのたしとさやおりれそこらしやをふのさしとさや
おし海のわたりふうしこふ火としく
天仁同行幸白亡此皆ニ敬奉供奉遊燎 日記
かへよのにをさせ行
柏梁殿 左少弁作

東宮於事ニ侍臣召集柏梁殿之ニく 此於是
柏梁殿ね於是日左右ニ申見九條太政相記
ゆきすりのつきをたなふくれと
御給年下年爵ヘ
たいすておふそまに
識知老者風情并見此事世一句詩 示天
天くの音をそれ日のやうつらしくつくり行く 進士よかわ
おぬるしおとさひりしこきぬしとえろ世派 加諸
さいの人まりのみ三人すんあり御あ
礼記ニ大楽正論進士ニ者以告于王而升諸司馬曰
進士注曰可進受爵禄者也
聖武天皇神亀始進士試 章生左京
進士及第例

承和六年春文章生若連珠詩 蒲善宗 氏宗下 及第三人 三月廿九判

従五 菅世主 相成 仲野親王男 三原永道 文長河

登科記曰式部卿是忠親王二男 進士及第

式瞻王

延喜十八年八月廿八日試 紀 常生 藤信 高風送秋鶴

以綺六韻 七言六韻 及第四人 九月廿八日判

北 菅原高樹 字ー章 大江維時 字ー二

春渕良規 字細二

北 藤原春房 字ー藝

已上四人不作閑韻及第

あきのつきめくらしやりえて志らしにけりけん

正行王高野親王男 弘仁七年補文章生天長八年十月

二日任侍従

源清平 是忠親王男 延喜二年九月文章生七年九月廿五日侍従

源保光 代明親王男 天ノ四年十二月廿日文章生 同十年正月廿日侍従

或本ニ天のあけ人々し五十よりはしむると四賀の事

四十しらぬ事

四賀事之年の内にあると賀ある故之

按摂政太政大臣純を試衆之ゝ

八月十九日六条院つくりいてゝわたり給ふ

さて六条院は河原院と撰ける也 此院はよみ

一世源氏作られけるを御相物なれ

延喜十七年三月十六日乙丑日薨 六条院

左大臣源融朝臣宅之 大納言源朝臣昇 進上院 延長二年

正月廿六日乙巳日参入 中六条院 亭子院

六條京極のわたりに中宮の御ふるき宮のほとりをしめ（四町）
らはしめてつくらせ給
うつほの物語に紀伊国むろの郡神なびのたねまつと云
長者家のわたりに四面八町の内に紫檀蘇枋くろ
かいるすきといふ木とも金銀瑠璃車
磲瑪瑙の大殿をつくりかさねて東の陣のとには春
の山南の陣のとには夏のかけ西の陣のとには秋の
林北には松の林四面を廻りてうゑ木草木をそへの
すかたせ給
此事を模せられたる松殿の源氏宮せんにあたり
造る四面八町なからに四季をまうけてすまし給
ると云へり如何
ひとなきことゝもつくりめく

正位豆守也
ゑん
岩藤く若瞭と云萬葉藤なとにあり古今集物名
かよいくさにとあり
むまやなとはひらうちゆひて
馬場殿
一説に乙殿氏寸舎となることゝいふて殿に有甲殿乙殿
又寝殿ともよみなことところのし
今案此義不然野分巻に寝殿となるのつとい心
おし殿にあさらぬ殿の字の訓とゝして云わ人とも
大路にあつされともなとかわかふすの殿字かん訓や
ひとのころやひわたり給
彼岸無法如道經に一切衆生依ね二八月斎十方世

別ノ切房主龍吉以来君瑞鳳 彼岸ぞ二月八日
幸含村於川彼岸斎食く
彼岸菴此ニ於テ彼岸
世のならひやとらつき行
着 かへりらく 着昨し
わてくのこまけ
乾く 細々
志かしいはのとの地のきねく
紫苑忌 なりて藤沼裏お埋さし
風ふらりまでらいけ時書花文といりくの松ふつけてそそあ
六のいゑねの松もこ海のふみまいえすねつくりしとすわ
いつくの松桜葉松く一方葉よおりえ松のねいさすねを
えもいゑあすとゆふ見れはくりしとて 遊花ゆん風情も

或年ニいゑねの松りつけてそそみやとに何の詞と
松同とはれめす
拾遺ニミえ良熱ニ 兼名廠のといひ給ふれい嫉む人とう
しうゆにいひらわいいまとし深く内にそうる樹と
みゆらいいておうこといけりのりあれく
なりさの松をゆいに今いもみらけいいまとまわ
寛永中ねまつらも桃松てくねてまはれことし本
えの小さなくいふいふうくにもなきとみれひすね
すりとて桃園の家れの方らの中のまちくらえれ額り
なりらき花とまくとおりてすきさとて紙かる事にと
えらしゆ木にて行つうに花のにおもしろきとされ
にとに孫わりくそそとつりねつては花なりん
下はそはさえ松そてのしさゑゑまつまで松なり

はけて春のゆくさ
かく秋と冬小雪まて秋はくれぬれけれと春成まつそらしき
たし
行く秋と人代ちとせのとくする春と知せハ春と雪ます
ゆくすゑまて
退也